
チャイナ＝タウン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャイナIIタウン

【Nコード】

N2930F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

横浜の中華街にふらりと入って出会った一人の女の子。日本人じゃない彼女の出会いには不思議と暖かいもので。チェッカーズシリーズ第三十三弾、後期のB面の曲です。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.geocities.co.jp/MusicStar-Guitar/3454/>

第一章

チャイナタウン

「寒いな」

横浜の冬は寒い。港町のせいか風が強く感じる。この時もそうだった。

俺はその時暇だった。野球を見ようにもシーズンオフだ。よりによってベ이스ターズはその年見事なまでに負けまくってくれて俺を春から寒くさせてくれた。横浜スタジアムで連日泣く破目に陥っていた。

「よくもまああれだけ見事に負けてくれたよ」

その日横浜スタジアムの前を通り掛かってそう言った。思えば何年前かの優勝の時以来ここでいい思いをしたことはあまりないような気がする。

金があるのに変な補強ばかりしているようにしか見えない。守備が下手な奴ばかりだ。チャンスには打たず、こっちはいざという時にこれでもかという位派手に打たれてくれる。何時からこんなチームになっちまったのか。

「監督云々の問題じゃねえな」

少なくとも俺はそう考えていた。監督だけであそこまで負けはしない。漫画やネットでネタにされまくった。あそこまでネタにされると不思議なもので笑うしかない。

乾いた、寒い笑いだった。

「あの時はよかった」

かつては無上の喜びを噛み締めてここから出たものだ。だが今は前を通るだけで暗鬱となる。この年俺が観た試合は全て負けた。その度に俺は別の場所に向かうのであった。この時もだった。

「行くか」

俺は右手を見た。そこには金色の門がある。中華街だ。

憂さ晴らしには丁度いい場所だ。嫌なことは食べて飲んで忘れるに限る。俺はその日もそうすることにした。

「来年があるな」

どうせ来年も最下位だろうな、と内心思っていたがそれはもう考えるつもりはなかった。とりあえずはこの憂さを晴らしたかった。それだけだった。

いつも広東料理の店に入る。魚介類が好きだからだ。中華に限らず和食も洋食も魚介類が好きだ。中華だと広東料理にそれが多いし美味い。だから俺はここに来るといつも広東料理の店に入ることにしていた。

「何処に入るか」

俺は街中を見回りながら考えた。どこも一通り入ったことがある。歩きながら考えた。やがて入ったことのない店に気付いた。

「こんな店があったのか」

見れば看板に広東料理とある。なら文句はない。俺は店の中に入った。

「来れ」

中国語で挨拶がかえってきた。この中華街では日本語で挨拶がかえってくることが多い。だから中国語を聞いてかえって新鮮な気持ちになった。

「どうも」

俺はそれに応えた。そして顔を上げた。

「おっ」

心の中で声をあげた。黒いさげの髪をした可愛らしい少女だった。小柄で透き通るような肌に大きな黒い瞳、そして小さく紅の唇をしている。それが赤い服によく合っていた。

「席はどちらにしますか」

今度は日本語で尋ねてきた。何処かただだしい。

「ええと、どちらでも」

一人だし特に気にはしていなかった。店の方に任せることにした。

「わかりました。ではこちらに」

彼女は俺を案内した。そして店の奥の二人用の席に座った。

「ご注文は」

「ええと」

海鮮麺と炒飯、魚介類の飲茶、そして家鴨の料理を頼んだ。そして酒。中国のワインだ。赤を頼んだ。

「畏まりました」

やはりたどたどしい日本語で応えた。暫くしてまず麺が来た。それを食べ終えた頃に炒飯と飲茶、そして酒。実によく考えられた順番だと思った。

第二章

食べてみて思ったことは他の店のそれよりも美味かったことだ。俺の舌に合っていた。店を出た時こう思った。また来よう、と。そして俺はそれからちゅこちよここの店に来た。そして何時しか店のこの少女と知り合いになった。

「また来られたんですね」

「うん」

顔馴染みになると笑顔も送ってくれるようになった。屈託のない明るい笑顔だった。

「美味しいからね」

それが第一の理由だった。しかしやがて他の理由も出来てきた。そちらの方がメインになるのに左程時間はかからなかったと思う。

何度目かここに来た時であった。俺は彼女に声をかけた。

「ねえ」

「はい」

彼女は俺に応えた。

「今度よかったら」

「はい」

言いながら考えていた。間違っても横浜スタジアムとは言えない。「少し外に行かない？一緒に」

「外に」

「うん。ここにずっと住んでいるんだろう？」

「ええ」

彼女はただたどしい日本語で答えた。

「留学してから。親戚の家に住み込んで」

「そうだったんだ」

予想通りだった。おそらくこの店もその親戚か知り合いの経営している店なのだろう。中国ではよくある話である。

「忙しい？」

俺は再び尋ねた。

「忙しかったらいいけれど」

「ええと」

彼女はそう問われて考え込んだ。

「水曜ならお店が休みだし。学校が終われば」

「じゃあその時で。待ち合わせ場所は」

「横浜スタジアムの前なら」

ここで彼女はこう提案してきた。それを聞いて俺は驚かざるには
いられなかった。

「えっ!？」

「あそこなら近いし。いいでしょ」

「それはそうだけれど」

「何かあったの？」

「い、いや」

今さっきあそこは駄目だろうと考えていたのは秘密だ。彼女は俺
が横浜ファンだということは知らない筈だ。だから俺が何故驚いて
いるのかはわからない。

「じゃあそれでいいよ。僕は」

「よかった」

彼女はそれを聞いて微笑んだ。

「じゃあ水曜ね。楽しみにしてるわ」

「うん」

こうしてデートの約束自体は簡単に進んだ。俺は水曜になるまで
が待ち遠しかった記憶がある。そして遂に水曜となった。

俺は学校が終わると身支度を整えすぐにスタジアムの前に向かっ
た。そこにはまだ誰もいなかった。

「早く来すぎたかな」

時計を見ると約束の時間より早かった。お湯を湧かせる位の時間
があった。

「待つか」

寒い。風が急に吹いてきた。それが木の葉を散らす。否が応でも冬を感じずにはいられなかった。

十分程経ったであろうか。中華街の入口から一人の少女がやって来た。

「おっ」

見れば彼女だった。普段の赤い中華風のウェイトレス姿とは違って変わった格好であった。こげ茶色のセーターの上に白い上着を羽織り、黒っぽい丈の長いスカートを履いている。地味だがよく似合っていた。そして黒いおさげの髪をほどいて後ろにたらしめている。波がかった髪がよく似合っていた。

「お待たせ」

「いや、今来たばかりだから」

「有り難う」

彼女はそれを聞いてこう言った。

「優しいのね、日本の男の人って」

「そうかな」

俺はそう言って誤魔化した。だが俺がここで待っていたのはお見通しらしい。

鋭いようだ。

「で、何処に行くの？」

「関内に行こうよ」

あそこの商店街は気に入っている。彼女も知っていると思うそう提案した。さて、どうなるか。俺は彼女の動向を注視した。これで成功したかどうかがわかる。

「いいわね」

彼女はそう答えて微笑んだ。

「あそこならいいわ」

「よかった」

俺はそれを聞いて素直に微笑んだ。

「じゃあ行こうか」

「ええ」

俺はタクシーを呼び止めようとした。だが彼女はそれを制した。

「それは必要ないわ」

「何で？」

「歩いていけばいいじゃない。歩いていける距離だし」

「いいの？」

確かに歩いていける距離だが女の子には少しつらいではないかと思いたクシーを呼んだのだったが。どうやらそれはいらぬお節介だつたらしい。

「それにお話もできるし」

「あ、そうか」

これには納得した。俺はそれに従い彼女と二人で歩いて関内に向かった。この時手を繋ごうかと思った。しかしそれは図々しいと思ったので止めておいた。そして歩きはじめた。話をしながら。

「ふうん、台湾出身なんだ」

「ええ」

彼女は答えた。

「高雄のね。ここと同じ港町よ」

「そうなんだ」

台湾には行ったことがない。だから高雄がどんな街かは知らなかった。

「横浜は綺麗だけれど高雄は違うわ。人が多くて」

「ふうん」

「けれどもいい街よ。活気があって。一度来てみたらいいわ」

「そうさせてもらうよ」

俺はそう答えた。

「その時は案内してくれる？」

「いいわよ」

彼女はそう切り返してきた。

「けれど条件があるわ」

「条件」

「ええ」

彼女は答えた。

「今のデートで楽しませてよね。台湾の女の子は厳しいわよ」

「畏まりました、娘々」

「お願いするわ」

台湾の女の子は気が強いとは聞いていた。だがここまではっきり言われるとは思わなかった。だがそれがかえって俺の好みに合った。今度は野球の話になっていた。横浜スタジアムの前で待ち合わせをしたからそれも当然だったかも知れない。だが俺は今一つ乗り気ではなかった。横浜の今シーズンのことを思うと乗れる筈もなかった。

「野球は嫌い？」

それを察したかこう尋ねてきた。

「い、いや」

俺はそれを慌てて否定した。

「高校まで野球部だったし」

これは事実だ。

「今もよく観ているよ」

「なら好きなのね」

「ああ」

「けれどその割に乗り気じゃないみたいね」

「ちょっとね」

俺はここで苦笑いを作った。

第三章

「何かあったの？」

「横浜ファンだからね」

これだけで充分だと思った。話していると彼女は日本の野球に詳しい。それならこれだけで話が通ると思ったからだ。

「ああ、そうだったの」

彼女は事情がわかったようだ。

「けれどいいじゃない。この前日本一になったんだし」

「まあね」

もう何年も前の話だ。本当に遠い過去の様にも思える。

「私のチームなんてもう凄く長い間日本一になっていないんだから」

「覇風の球団は何処？」

「ドラゴンズよ」

彼女はそう答えた。

「中日かい」

「ええ。ほら、台湾の助っ人がいたでしょ」

「ああ、あの人だね」

郭源治というピッチャーがいた。台湾出身で剛速球とマウンドでの派手な叫びで有名だった。横浜は何でも大洋時代にこのピッチャーにえらくやられたらしい。しかしその人柄は凄くよかったという。

「あの人がいたから。応援しているの」

「そうだったんだ」

「私とは違うけれどね」

「それはどういう意味？」

俺は最初その言葉の意味がわからなかった。

「あ、あの人高砂族なのよ」

「高砂族」

「ええ」

彼女は答えた。

「台湾の山の方に住んでいる人達なの。知らないのかしら」

「悪いけれど」

俺は台湾といえば中国人が住んでいるとばかり思っていた。だがどうやら違うようだ。

「彼はそこでその運動神経を見込まれてね。それでプロ野球選手になったのよ」

「そうだったんだ」

「凄かったでしょ、彼」

彼女はそう言って得意気に俺を見上げてきた。

「憎たらしい程ね」

俺は苦笑してそう答えた。

「俺の親父がそう言っていたよ」

「お父さんも野球が好きなのね」

「ああ。阪神ファンでな」

横浜にも阪神ファンはいるのだ。またこれが野球のことになると人が変わる。

阪神ファンというのは本当に特別な人種だということに思わせられる。

「巨人の次位に嫌っていたよ」

「光栄ね」

「光栄か」

「ええ。敵にそんなに憎まれるなんて。嬉しいわ」
不敵な笑みを浮かべつつそう言う。

「貴方もそう思うでしょ」

「昔はね」

俺は無然とした顔でそう返した。

「今はとてもそんなことは言えないさ」

「あら、どうして」

「ここのファンだからさ」

ここで横浜スタジアムを親指で指し示した。

「今年は本当によくやってくれたよ。どこまで負ければ気が済むのやら」

「あらあら」

笑っていた。本当に日本の野球に詳しい。

「まあ来年があるから」

「来年はもっと負けるかもな」

「そう言わずに」

野球の話をしながら進んだ。そして関内の商店街に来た。結構な距離だが案外短く感じた。やはり二人だったからであろうか。

二人で話をしながら商店街を進んだ。野球の話は終わり台湾の話に移っていた。

「何か日本とあまり変わらないな」

「そうでもないわよ」

話を聞くだけだと日本に似ているが違うらしい。

「細かいところはね。色々と」

「そうなんだ」

「例えば受験なんて凄いんだから」

「それは日本でも同じだよ」

俺もそれなりに受験勉強では苦労してきた経験がある。だからこそこう言えた。

「日本の比じゃないのよ」

「まさか」

「私だってね、凄く勉強したんだから。もう一日中よ」

「それで大学に受かったんだね」

「ええ。けれどこれで終わりじゃないわ」

「大学に入ったら終わりじゃないの!？」

これには少し驚いた。

「台湾では違うのよ」

「どう違うの?」

「大学院にも行かなくちゃいけないし。留学も大事なのよ」

「それで日本に来たんだ」

「そうよ」

得意気にそう語った。

「どう、だから日本語上手いでしょ」

「まあね」

本当を言うともまだかなりたどたどしいと思う。けれどそれは言わないことにした。

だがそれはすぐにばれてしまった。

「あ、今違うと思ってるでしょ」

「え、いや」

凶星を衝かれて思わず焦った。

「違うよ」

「顔に書いてあるわよ」

彼女は俺の顔を見上げてそう言った。

「嘘が下手な人ね、貴方って」

「ううっ」

「けどいいわ」

しかしここでうっすらと微笑んだ。

「悪意はないから。親切で言ったんでしょ？」

「まあそうなるかな」

「日本人らしいわ。日本人ってそういう人が多いのよ」

「否定はしないよ」

実際そうだと思うからである。いいか悪いかは全く別問題として日本人は嘘をつくのが下手だと個人的に思っている。

「はっきり言わないところもあるわね」

「それも否定しないよ」

世界中から言われているような気がする言葉だ。何回聞いたかわからない。

「けれどそれがいいわ」

彼女はそう言っにいと笑った。

「日本人のそういったところも好きなのよ」

「本当に!？」

世界中から批判されていることなのでこれには正直驚いた。

第四章

「何か日本とあまり変わらないな」

「そうでもないわよ」

話を聞くだけだと日本に似ているが違うらしい。

「細かいところはね。色々と」

「そうなんだ」

「例えば受験なんて凄いんだから」

「それは日本でも同じだよ」

俺もそれなりに受験勉強では苦労してきた経験がある。だからこそこう言えた。

「日本の比じゃないのよ」

「まさか」

「私だってね、凄く勉強したんだから。もう一日中よ」

「それで大学に受かったんだね」

「ええ。けれどこれで終わりじゃないわ」

「大学に入ったら終わりじゃないの!？」

「台湾では違うのよ」

「どう違うの？」

「大学院にも行かなくちゃいけないし。留学も大事なのよ」

「それで日本に来たんだ」

「そうよ」

得意気にそう語った。

「どう、だから日本語上手いでしょ」

「まあね」

本当を言うとまだかなりたどたどしいと思う。けれどそれは言わないことにした。

だがそれはすぐにばれてしまった。

「あ、今違うと思ってるでしょ」

「え、いや」

凶星を衝かれて思わず焦った。

「違うよ」

「顔に書いてあるわよ」

彼女は俺の顔を見上げてそう言った。

「嘘が下手な人ね、貴方って」

「ううっ」

「けどいいわ」

しかしここでうっすらと微笑んだ。

「悪意はないから。親切で言ったんでしょ？」

「まあそうなるかな」

「日本人らしいわ。日本人ってそういう人が多いのよ」

「否定はしないよ」

実際そうだと思うからである。いいか悪いかは全く別問題として日本人は嘘をつくのが下手だと個人的に思っている。

「はっきり言わないところもあるわね」

「それも否定しないよ」

世界中から言われているような気がする言葉だ。何回聞いたかわからない。

「けれどそれがいいわ」

彼女はそう言ってにいつと笑った。

「日本人のそういったところも好きなのよ」

「本当に!？」

世界中から批判されていることなのでこれには正直驚いた。

「ええ」

彼女は答えた。

「少なくとも私はね。そういうのを全部知ってから来たんだもの」

「日本に」

「そうよ。留学先もわざわざここにしたの。台湾での留学はアメリカが一番人気があるんだけれど」

「やっぱり」

これはわかる気がする。

「ええ。それでもね。日本にしたの。日本語もお爺ちゃんから勉強して」

「あつ、昔日本だったからね」

「そうなの。お爺ちゃんは今でも日本だった頃を懐かしい、って言うてるわよ」

「それは意外だなあ」

「そうかしら」

「うん」

俺は答えた。

「僕が子供の頃は日本は悪いことばかりしてきたって教えられてきたからね」

「随分偏った教育ね」

「学校の先生なんてそんなもんさ。狭い世界だからね」

本当にそう思う。全てがそうではないが教師というのは本当に視野が狭い人間が時々いる。中には人間性も疑わしい者までいる。これはどの社会でもそうかも知れないが閉鎖的な社会ではそうした人物が多いように思える。俺はたまたま学校でそうした教師を見てきたからそう思うだけかも知れないが。

「台湾だってそれは一緒だったわ」

「そうなんだ」

「ええ、最近までね。国民党だったから」

「ああ、成程」

これは少し聞いたことがある。何でもかなり酷いことをやっていたらしい。

「もう終わったけれどね。それでもお父さんやお母さんの頃は酷かったらしいわ」

そう語る彼女の目に怒気が漂った。

「私はそうした二人に小さい頃から勉強しろ、勉強しろと言われて

きたのよ」

「色々あったみたいだね」

「台湾では何かを言うのにも学歴が必要だから」

「本当に極端だね」

「日本じゃそこまでいかないでしょ」

「まあ」

大卒が何かにつけて有利なのは事実だがそこまではいかないと思う。高校、いや中学卒業でも言える人間はちゃんと言う。俺の友人でもそうだ。

「そこはいいと思うわ。私も今まで勉強ばかりだったから」

「それで今ここに來れたんだね」

「あっ、そうね」

それを聞いて以外そうな顔をした。

「そういう考えもあるわね」

「うん」

「で、今ここを歩いていられると」

「そうそう」

「そう考えると不思議ね。何か気が楽になってきちゃった」

何か急に日本語が上手くなったように感じた。いや、本音を出したからだろうか。

言葉よりも本音を出した方がいいのだろうか。

「ねえ、よかったら」

「うん」

「ここ案内して。あまり來たことなくて詳しくないのよ」

「いいの、僕で」

「折角だからね。貴方もそのつもりで私を誘ったんでしょ？」

「ご名答」

やはり鋭い。ここまで手の内を読まれているとは。

「けれどいいわ。乗るわ、そのお誘い」

「乗るの」

「そうよ。お願いね」

「わかったよ」

といってもここは案内するには注意が必要だ。少し出ればホテル街がある。幾ら何でもそんなところを見せるわけにはいかない。風俗も多い。よくよく考えればこんな場所を子供の頃から遊び場にしていた俺も俺だ。

とりあえずは腹ごしらえをすることにした。スパゲティの店に入った。チェーン店で味は一定している。特に量が多いことで有名な店だ。

第五章

「イタリア料理ね」

「うん。台湾でもあるかな」

「日本程多くはないわ」

「そうなんだ」

「だからあまり食べたことはないの。スパゲティは好きだけれど」

「じゃあそれを食べる？あとピザも」

「ええ。貴方に任せるわ」

「それじゃ」

俺はその言葉に頷いた。そして注文した。ここで彼女が言った。

「あっ、待って」

「何!？」

「この黒いスパゲティだけれど」

彼女はメニューを見ていた。

「これ一体何なの？」

「イカの墨を使ったスパゲティだよ」

俺はそれについて答えた。

「イカの墨」

「うん。イタリアにはそうしたパスタもあるんだ。食べてみる？」

「面白そうね」

乗り気だった。これで決まりだ。

「じゃあそれにするか」

「ええ」

こうして俺達はそのイカ墨のパスタとピザを注文した。程なくしてパスタとピザが運ばれて来た。

「ではいただきます」

フォークを手にしスパゲティをとり皿に入れる。そしてそれを口にした。まず彼女からだ。

「どう？」

俺は尋ねた。彼女は食べ終えてから答えた。

「美味しいわ」

「よかった」

それを聞いて安心した。紹介した料理がまずかったら話にもならない。

「ただ食べた後お口が黒くなっちゃいそう」

「それはあるよ」

「けれどそれでも美味しいわ。面白い味ね」

「そうだろう、一度食べたら病みつきになるんだよ」

実はこのイカ墨のパスタが大好きなのだ。だからこそ彼女に薦めた。そしてそれは成功した。

食べ終えた後慎重に街中を案内した。食べた後はまた色々と話をした。

「暫く日本にいるんだ」

「ええ。大学に入って間もないし」

「どれ位」

「そうねえ。一年程かしら」

「そうなんだ。じゃあこれからも会えるね」

「うん」

またデートに誘えると思った。ここでレコード屋の前からある曲が流れてきた。

「あっ」

彼女はそれを聞いて足を止めた。それは中国風の曲であった。

「どうしたの？」

「この曲」

どうやら知っている曲のようだ。

「台湾の曲よ。あっちで有名な歌手の」

「そうなんだ。じゃあ買ってあげようか？」

「いいの？」

「いいよ」

これ位は先行投資のうちだ。女の子と付き合い合おうと思ったたら金
のことは気にしてはいけない。

「じゃあ入ろう」

そして彼女をレコード屋の中に誘った。

「ええ」

そして俺は彼女にその歌手のCDを渡した。受け取った彼女の顔
は朗らかなものであった。

「有り難うね、謝々」

「いいよ、お礼は」

正直言って恥ずかしかった。そう言って誤魔化した。

「後で聴くといいよ」

「うん、わかったわ。そうさせてもらうわ」

彼女はそれに答えた。

「帰ったら楽しみね」

「今のデートは？」

「それも勿論。けれど帰ってから楽しみがあるのっていいじゃない
い」

「それはそうだね」

一瞬ギクリとしたがそれならよかった。

俺達はそれから暫く街を歩きながら話をしていた。そして俺達
は中華街に戻り別れた。それが俺達の最初のデートだった。

第六章

それから俺達は会った。

店で会ったりデートをしたり。そうして時間は楽しく過ぎていった。だがそれも終わる時が来る。時間は過ぎて何時か終わりがくるものなのだ。そしてそれは突然やってくることもあるのだということと俺はこの時に知った。

「えっ」

それを聞いた時俺は思わず言葉を漏らした。

「それ本当!？」

「ええ」

彼女は悲しそうに頷いた。実家が破産したらしいのだ。

「それで留学のお金が……。大学はかろうじて残れるみたいだけれど」

台湾の方の大学だ。

「そうなんだ。それじゃあ日本には」

「ええ。残念だけれど」

泣きそうな顔になっていた。もう耐えられないようだ。

「これでお別れなの。もう」

「残れないの? お金の方を何とかして」

「それも考えたけれど」

首を横に振った。

「駄目だったわ。今いるお店にもそこまでの余裕はないし」

「そうなんだ。それじゃ」

「ええ。お別れね」

そう語る彼女の目が潤んでいた。

「一週間後帰るわ。船で」

「船でか」

「ええ。お金がないから。横浜の港からね」

「そうなんだ」

何か言葉にならなかった。頷くだけしかできなかった。

「それでね、お願いがあるの」

「うん」

「その日、来てくれるかな。港に」

「いいの？」

「ええ」

彼女はこくり、と頷いた。

「絶対に来て。お願いだから」

「うん」

「待ってるからね。それじゃ」

そう言って喫茶店を後にした。俺は彼女が帰った後一人でそこに座っていた。

「いきなり言われてもな」

だが彼女の方がショックなのだろう。そこでそう考えた。

一週間後、それで彼女は日本を去る。そう考えると急に悲しくなってきた。

「どうしろっていうんだよ」

だがどうしようもなかった。俺にはどうしていいかわからなかった。だが港に行くしかないと思った。最後に彼女と会う為にも。残念だがそれしかないことがわかっていた。本当に残念だった。

うじうじ考えている間に一週間が過ぎてしまった。その日が来た。俺は釈然としないまま港に向かった。そこでは船の汽笛の音が木霊していた。

何処にいるだろうか。辺りを見回した。客船は別の場所らしい。俺は原付きの自転車に乗ってそちらに向かった。着くとそこにはあまり大きくない客船が停泊していた。古い船だった。

「来てくれたのね」

その前に彼女が立っていた。栈橋の前に一人立っていた。

「有り難う、来てくれて」

「うん」

俺は自転車から降りて栈橋の前に来た。

「これが最後になるかも知れないからね」

「ええ」

彼女は頷いた。そして懷から何かを取り出した。

「これ、返すわね」

それは俺が最初のデートで渡したあのCDだった。

「有り難うね、買ってくれて」

「返さなくていいよ」

しかし俺はそれを受け取らなかった。

「どうして？」

「僕が君にプレゼントしたものだからね。だからいいよ」

「いいの？」

「うん。だから気にしないでいいよ」

「わかったわ。それじゃ」

彼女はそれを聞いてくれた。CDをしまった。

「船で、そして帰ってからもうゆっくりと聴かせてもらおうわ」

「うん」

「あとね」

そして彼女は切り出した。

「私からの贈り物よ」

「贈り物？」

「ええ」

彼女はそう答えてにこりと微笑んだ。

「二つあるけどいい？」

「ああ、いいよ」

断る必要もなかった。俺はそれに頷いた。

「まずはね、これ」

彼女は頭にさしていた。紅い花を手にとった。そしてそれを俺に手渡した。

「造花だけれど。大切にしてね」

「うん」

椿だった。それを見て何故か悲しい気持ちになった。そのわけはわかっていた。微かにその香りがしたように感じた。

「そしてね、これも」

そう言う顔近づけてきた。

「？」

最初何をするのかわからなかった。だがそれは一瞬だった。

彼女は自分の唇と俺の唇を重ねてきた。キスだった。キスといつても軽いフレンチキスだった。だがそれだけで充分だった。

「これね」

それを終えた彼女は真っ赤な顔で言った。

「お別れに。その」

恥ずかしそうに俯いている。

「私キスってはじめてだから。その。上手くはないけど」

「いいよ」

俺は微笑んでそれに答えた。

「上手くは言えないけれど」

そう断ったうえで彼女に言った。

「気持ち伝わったから」

「そうなの。それなら」

彼女はそれを聞いてはにかんで笑った。

「よかったわ。それでね」

「うん」

「よかったら来てくれるかしら。高雄に」

「いいの？」

「うん」

こくり、と頷いた。

「よかったらね。待っているから」

「よかったらじゃないでしょ」

僕はここで彼女に対してこう言った。

「えっ」

それに驚いて顔をあげてきた。

「絶対に来て欲しいんでしょ」

「え、ええ」

顔がさらに赤くなった。

「よかったらね」

「わかったよ」

僕はそれに答えた。

「絶対に行くよ。それまで待っててね」

「ええ」

「行く時になったらメールするから」

「楽しみにしてるわ」

彼女は朗らかに笑って答えた。

「だから、絶対に来てね、本当に」

「うん」

俺は答えた。

「楽しみにしてるから」

「じゃあそれまで」

「暫くお別れね」

ここで船内から放送が入った。出向用意だ。

「あっ」

それを聞いて俺も彼女も顔をあげた。

「行かなくちゃ」

「うん」

「じゃあ色々名前残惜しいけれど」

「これで」

「再見」

最後はあちらの言葉だった。彼女は泣いてはいなかった。俺とまた会うのを楽しみにして笑っていた。

船は出港した。彼女は船の上から俺を見ていた。そして俺も彼女を見上げていた。

それは船が見えなくなるまで続いていた。船が完全に水平線に消えた時俺は呟いた。

「絶対に行くからね」

もう夜が近付いてこようとしていた。暗くなる前に帰ることにした。夕食は中華街でとった。

「またここに一緒に来れたらな」

ふとそう思った。だがそれは横浜においてではない。

「高雄か。どんな街かな」

そう考えると楽しくなってきた。まずは行く為の用意だ。

「お金に、それに」

考えるだけで楽しくなってきた。そしてその準備も。俺は今から彼女に再会するのを楽しみにしていることに気付いた。

そしてそれが恋なのだと知った。悪くはないものだと思った。

チャイナⅡタウン 完

2005・2・1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2930f/>

チャイナ＝タウン

2011年4月28日01時25分発行